

第一章 『雪解けの宿、鎧を脱ぐ時』

山あいの静寂を、車のエンジン音がゆっくりと切り裂いていく。
都会の喧騒からは遙か遠く。地図アプリでさえ時折位置を見失うほどの深山幽谷に、その旅館はあった。

秘湯、という言葉がこれほど似合う場所もないだろう。まだ雪の残る木々の枝が、重たげに頭を垂れている。吐く息が白く染まるほどの冷気の中、車を降りた俺たちは、老舗旅館の暖簾の前で足を止めた。

「ほう。悪くない趣だ」

隣に立つ女性——スカサハが、感心したように細い目を向ける。

その声は鈴が鳴るように美しく、同時に絶対的な威厳を含んでいた。

影の国の女王にして、幾多の戦士を育て上げた師。そして、今は俺の隣に立つ、たった一人の女性。

現代の衣服……落ち着いた色合いのロングコートを纏ってはいるが、その内側から滲み出る気品と、隠しきれない肢体の美しさは、すれ違ふ仲居たちの視線を釘付けにしていた。

「……何を呆けている。チエックインは済ませたのだろうか？ 行くぞ」

俺が彼女の横顔に見惚れていると、すぐにその鋭い視線が飛んできた。

呼称はない。彼女は決して俺のことを「きみ」や「あなた」といった代名詞で呼ばない。それでも、その言葉が誰に向けられたものか、痛いほどに伝わってくる。

俺は慌てて荷物を持ち直し、彼女の後を追った。

通されたのは、離れにある特別室だった。

渡り廊下を進むにつれ、硫黄の微かな香りが漂ってくる。

重厚な引き戸を開けると、そこには十二畳の本間と、広縁、そしてその先には専用の露

天風呂が湯気を上げていた。

「へえ……。なかなか、風流じゃないか」

スカサハは部屋の中央まで進むと、ゆっくりと周囲を見渡した。畳を踏む足音が、やけに心地よく響く。

彼女は窓際に歩み寄ると、ロングコートのボタンに手を掛けた。

「暖房が効きすぎているな。少し暑いくらいだ」

そう言って、彼女は躊躇いなくコートを脱ぎ捨てた。

その瞬間、俺の喉がごとりと鳴った。

コートの下に現れたのは、彼女の象徴とも言える衣装——身体のラインを極限まで強調する、あの紫紺のボディースーツだった。

現代社会の旅館という「日常」の空間に、神話の時代の空気を纏った「非日常」の彼女が

立っている。そのギャップが、強烈な背徳感となって俺の脳髓を刺激した。

まるで第二の皮膚のように吸い付く生地は、彼女の豊満な胸の膨らみ、くびれた腰、そしてしなやかな脚線美を、一切の妥協なく浮き彫りにしている。

「……ん？　なんだ、その目は」

スカサハが振り返る。

その真紅の瞳が、俺の視線の先——特に胸元あたりに注がれていることを見逃すはずがなかった。だが、彼女は不快そうにするどころか、口元に妖艶な笑みを浮かべた。

「授業中以外で、そう熱心な視線を向けてくるとは。……ふふ。まあいい。今日は戦場ではないのだからな」

彼女は一步、また一步と、俺との距離を詰めてくる。

カツ、カツ、とヒールの音が近づいたに、心臓の鼓動が早鐘を打つ。

目の前まで来ると、彼女は俺の手から荷物を取り上げ、無造作に床へと置いた。そして、

空いた両手で俺の頬を包み込む。

「顔が赤いぞ。湯にあたる前からのぼせたか？」

至近距離。

長い睫毛の一本一本まで数えられそうな距離で、彼女の吐息がかかる。

甘いような、それでいて背筋が伸びるような、彼女特有の香り。

「さて……。まずは旅の埃を落とすし、浴衣に着替えるのでしょうか。ここでの作法に従うのも、また一興だろう」

彼女は悪戯っぽく微笑むと、俺から身を離した。

そして、部屋の隅に置かれていた浴衣と帯を手に取り、俺に向かって軽く顎をしゃくつた。

「見ていないで、さっさと準備をする」



それは命令であり、甘い誘いでもあった。

—————

着替えの時間というのは、ある意味で戦闘中よりも緊張する瞬間かもしれない。

俺もまた、用意された男性用の浴衣に着替えるために、彼女に背を向けて帯を解いた。

背後からは、衣擦れの音が聞こえてくる。

シュツ、という独特の、あのボディースーツが肌から離れる音が鼓膜を揺らす。

想像してはいけないと思いつつも、脳裏には鮮明な映像が浮かんでしまう。あの完璧な肉体が、露わになっていく様が。

「……帯の結び方、怪しいな」

不意に、背中合わせの距離から声があった。

ビクリと肩を震わせて振り返ると、そこには既に浴衣姿になったスカサハが立っていた。



そして、その姿を見た瞬間、俺の思考は完全に停止した。

「ど、どうした？ そんなに目を丸くして」

スカサハが不思議そうに首を傾げる。

無理もない。俺の反応は劇的すぎたかもしれない。だが、これは不可抗力だ。

彼女が選んだのは、深い藍色の浴衣だった。

白い肌とのコントラストが美しいのは言うまでもないが、問題はそこではない。

サイズだ。

旅館の標準的な浴衣では、彼女の規格外のプロポーションを収めきるには、いささか布面積が心許なかったのだ。

特に、胸元。

豊かな双丘は、合わせ目がはちきれんばかりに主張している。少し動けば零れ落ちてしまいそうな危うさと、布越しに伝わる圧倒的な重量感。

帯によって強調されたウエストの細さが、逆にバストとヒップの豊満さを際立たせてい

た。

全身タイトの時にはまた違う、布一枚を隔てただけの「生々しい」色気が、そこにはあった。

「……ふむ。やはり少し、窮屈か」

俺の視線の意味を悟ったのか、彼女は自身の胸元に手をやり、わざとらしく胸を張ってみせた。

たぶん、と豊かな果実が揺れる幻聴が聞こえた気がした。

浴衣の襟元がわずかに開き、白く深い谷間が覗く。

「この国の装束は、胸を押し殺して着るものだと聞いていたが……。私のこれは、少々主張が激しすぎるようだな」

困ったものだ、と言いながらも、その表情は全く困っていない。むしろ、俺の反応を楽しんでる捕食者の顔だ。



彼女はゆっくりと俺に近づくと、俺の緩んだ帯に手を伸ばした。

「ほら、じつとしていろ。だらしなない格好は許さんぞ」

しなやかな指先が、俺の腹部に触れる。

帯を締め直す手つきは、驚くほど手際が良かった。

だが、その作業の間、彼女の身体が俺に密着していることが、何よりの拷問だった。

吐息がかかる距離。彼女が動いたたびに、豊かな胸が俺の腕や胸板に押し付けられる。柔らかに、温かく、そして弾力のある感触。

薄い浴衣越しだからこそ、体温がダイレクトに伝わってくる。

「……心拍数、上がっているな」

帯を結び終えた彼女が、俺の胸に手を当てて言った。

見上げれば、妖艶な瞳が俺を見透かすように覗き込んでいる。



「戦場でもないのに、これほど乱れるとは。……修行が足りないのではないか？」

彼女の指先が、トン、と俺の心臓の上を叩く。

そしてそのまま、指先はゆっくりと上へ這い上がり、俺の顎に触れた。

「だが、悪くない反応だ。……むしろ、愛おしいとさえ思う」

囁くような声。

普段の厳しい師としての顔ではなく、ただ一人の男を愛でる女の顔。

彼女はつま先立ちになると、俺の耳元に唇を寄せた。

「これから汗を流すというのに……。先に、別の汗をかいてしまいそうだ」

その言葉に含まれた意味に気づいた時、俺の顔は沸騰したように熱くなった。

彼女はくすりと笑い、身体を離す。



「冗談だ。……まだ、な」

意味深な余韻を残し、彼女は広縁の方へと歩き出した。

窓の外には、夕闇が迫りつつある。

露天風呂からは白い湯気が立ち上り、彼女の浴衣姿を幻想的に包み込んでいた。

「さて。まずは湯に浸かるとしよう。……背中くらいは、流してやってもいいぞ？」

振り返りざまのその言葉は、拒否権など最初から存在しない、女王からの慈悲深い命令だった。

広縁の椅子に腰掛けたスカサハは、窓の外の雪景色を眺めていた。

俺はと言えば、部屋の隅にある冷蔵庫から冷えたお茶を取り出し、喉を潤すことでどうにか理性を保とうとしていた。



だが、視線はどうしても彼女の方へと吸い寄せられる。

座ったことで、浴衣の裾が割れ、白くなめらかな太腿が露わになっていた。

彼女は足を組む癖がある。その動作一つ一つが、芸術品のように洗練されており、同時に扇情的だ。

普段の戦闘時、あのボディスーツ姿での足運びも見事だが、こうして布がはだける様を見るのは、また別種の破壊力がある。

「……美味しいか？」

不意に問われ、俺はお茶を吹き出しそうになった。

「茶のことではない。……その眼で味わう、私の姿のことだ」

バレている。

いや、隠せるはずもなかった。



彼女は椅子の背もたれにゆったりと身体を預け、手招きをした。

「こっちへ」

逆らえるはずもなく、俺は彼女の元へ歩み寄る。

椅子のすぐそばに立つと、彼女は俺の手首を掴み、ぐいっと引き寄せた。

バランスを崩した俺は、あわや彼女の上に倒れ込みそうになり——寸前で踏みどどまる。だが、その体勢は、まるで彼女を抱きしめるかのような格好になった。

顔と顔の距離は、数センチ。

「ふふ。もう少し大胆に来るかと思つたが……意外と臆病だな」

彼女の熱い視線が絡みつく。

浴衣の胸元が大きくたわみ、深い谷間が眼前に迫る。そこからは、湯気のような甘い香りが立ち上っていた。



「見る。私の肌も、少し高揚している」

彼女は自身の手で、浴衣の襟をさらに寛げた。

鎖骨から胸の膨らみにかけて、ほんのりと桜色に染まっているのが見て取れる。それは寒さのせいではない。俺と同じ、内に秘めた熱のせいだ。

「……触れてみたいか？」

悪魔的な誘惑。

俺が唾を飲み込むと、彼女は満足そうに目を細めた。

「焦るな。楽しみはこれからだ」

彼女は掴んでいた俺の手首を放すと、すっと立ち上がった。

その拍子に、豊かな胸がぶるんと大きく揺れる。



「さあ、行くぞ。湯が冷めてしまふ」

彼女は俺の手を取り、指を絡ませた。

恋人繋ぎ。

冷たいはずの彼女の手は、驚くほど温かった。

「……逃がさんぞ。今夜は、朝までたっぷりと可愛がってやるからな」

耳元で囁かれたその言葉は、これから始まる長い夜の宣戦布告だった。

俺たちは手を繋いだまま、湯気の立ち込める脱衣所へと足を踏み入れた。

第10章 『湯船という名の密室、重なる熱』

脱衣所の引き戸を閉めた途端、世界から音が消えた気がした。

聞こえるのは、外の岩風呂から響く微かな水音と、互いの少し荒い呼吸音だけ。薄暗い照明が、スカサハの横顔を妖しく照らし出している。

彼女は俺の手を離すと、くるりと背を向けた。

そして、先ほど俺が苦勞して——いや、役得として締めさせてもらった帯に、自ら手を掛ける。

さらり、と絹擦れの音が鳴る。

帯が床に落ち、藍色の浴衣がふわりと緩んだ。

「……見惚れている暇があったら、さっさと脱ぐことだ。それとも、私が手伝ってやろうか？」

肩越しに投げかけられた視線は、挑発的だ。

だが、その言葉が終わるか終わらないかのうちに、彼女は浴衣を肩から滑らせた。重力に従って、布が足元へと崩れ落ちる。



現れたのは、白磁の裸身。

先ほどのボディスーツ姿も強烈だったが、何も纏わない彼女の破壊力は、次元が違っていた。

特に目を奪うのは、やはりその胸だ。

豊かな双丘は、解放された喜びに震えるように、たわわな重量感を主張している。完璧な円を描くような形、透き通るような白さ、そして先端に灯る桜色の蕾。

神話の女神がそこにいた。いや、彼女こそが神話そのものなのだ。

「……ふふ。正直な視線だ。だが、許す」

スカサハは俺の方を向くと、自身の両手で、その豊かな胸を下から優しく包み込んだ。むにゅり、と白い肉が指の間から溢れ出る。

彼女はまるで宝物を愛でるように、自分の胸を誇らしげに見せつけてきた。

「どうだ？ 少し……育ったかもしれないな」



彼女は指先で、自身の柔らかかな肉をこねるように動かす。
そのたびに、双丘は形を変え、吸い付くような弾力を見せつける。

「影の国にいた頃より、現界してからのほうが調子が良い。……重くて戦闘の邪魔になるかと思っただこともあったが、こうして視線を釘付けにできるのなら、悪くない武器だ」

彼女は一步近づき、俺の手を取って、自分の胸へと導いた。

「ほら。……触れてみる」

恐る恐る伸ばした指先が、その温もりに触れる。

想像を遙かに超えた柔らかさだった。

指が沈み込む。まるで極上のマシユマロか、雲に触れているような錯覚。
だが、中には確かな重量感と、ドクドクと脈打つ生命の熱がある。

「ん……っ」



俺の手のひらが胸全体を包み込むと、彼女の口から甘い吐息が漏れた。少し上気した瞳が、潤みを帯びて俺を見つめる。

「……温かいな。この手は」

彼女は俺の手の上から自分の手を重ね、さらに強く胸へと押し付けた。心臓の鼓動が、手のひらを伝わって直接響いてくる。

俺の理性が、音を立てて崩れ去りそうになる瞬間だった。

「さあ……。焦らすのはここまでだ。湯が待っている」

彼女は名残惜しそうに俺の手を離すと、優雅な足取りでガラス戸を開けた。

冷たい夜気が流れ込んでくるが、俺たちの身体の熱を冷ますには、到底足りそうになかった。



露天風呂は、岩造りの野趣あふれるものだった。

湯気越しに見える雪景色は絶景だが、今の俺には景色を楽しむ余裕などない。先に湯船に入ったスカサハが、お湯に浸かりながら俺を見上げているからだ。

乳白色の湯が、彼女の鎖骨あたりで揺れている。

湯面の下には、あの豊かな肢体が沈んでいるのだと思うと、それだけで血が沸騰しそうだ。

俺もまた、覚悟を決めて湯船へと足を踏み入れた。

熱い湯が身体を包み込む。

だが、隣に並んだ彼女の肌のほうが、湯よりも熱い気がした。

「……ふう。良い湯だ」

スカサハは緑に頭を預け、長い髪を湯に浮かべていた。

上気した頬に、汗がひと筋伝う。

俺は少し距離を取って座っていたのだが、それが彼女には不満だったらしい。湯の中で手が伸びてきて、俺の太ももを掴んだ。

「遠い。……こっちへ来い」

抗う術はなく、俺は引き寄せられるままに彼女の隣へ移動する。

肩と肩が触れ合う距離。

いや、それだけではない。湯の中で、彼女の柔らかな太ももが、俺の足に絡みついてきたのだ。

「……っ、スカサハ？」

「なんだ。……ただのスキンシップだぞ？」

彼女は悪戯っぽく笑うと、そのまま俺の首に腕を回し、体重を預けてきた。

湯の浮力も相まって、彼女の豊富な胸が、俺の二の腕にむにゅりと押し付けられる。

濡れた肌同士が密着する感触は、言葉にできないほど滑らかで、官能的だ。

「……本当に可愛いな。こんなことで身体を強張らせて」

彼女の唇が、俺の耳元を掠める。

熱い吐息が鼓膜を震わせ、背筋に電流が走る。

「だが、嫌いではない。……その初心な反応が、私を昂らせる」

彼女の手が、湯の中で俺の胸板を這う。

指先が乳首を掠め、腹筋をなぞり、さらに下へと――。

俺は思わず彼女の手首を掴んで止めた。

「だ、ダメだ。ここじゃ……」

「ふふ。……そうか？ 誰も見ていないぞ？」



彼女は余裕の笑みを崩さないが、その瞳の奥には、とろりとした欲情の色が浮かんでいた。

彼女は掴まれた手首をひねり、逆に俺の手の指を絡め取る。そして、その手を再び自分の胸へと導いた。

「今は……ここだけで我慢してやる。だから……」

彼女は俺の手を、濡れた胸へと押し当てた。湯に濡れた肌は、先ほどよりもさらに滑らかで、吸い付くようだ。石鹸などつけていないのに、指が滑るように動く。

「……んんっ……」

俺が指先で先端を弾くと、彼女の身体がビクリと跳ねた。口から漏れる吐息が、先ほどよりも熱く、甘くなる。



「……いいぞ。もっと……触れ。私の全てを……確かめろ」

それは許可であり、命令だった。

俺は覚悟を決め、両手で彼女の身体を抱き寄せた。

滑らかな背中を撫で下ろし、くびれた腰を抱く。

そして正面では、豊かな双丘が俺の胸板に押し潰され、形を変えている。

至福。

その一言に尽きる。

世界最強の戦士であり、女王である彼女が、今、ただの女として俺の腕の中にいる。その事実が、俺の征服欲と庇護欲を同時に満たしていく。

「……顔を上げろ」



夢中で彼女を抱きしめていると、凜とした、しかしどこか甘えたような声が降ってきた。顔を上げると、潤んだ瞳のスカサハと視線が交わる。

彼女はゆっくりと顔を近づけ、俺の唇を奪った。

チュツ、という軽い音。

だが、それは合図に過ぎなかった。

彼女はすぐに再び唇を重ね、今度は深く、貪るように俺を求めてきた。

「ん……っ、あ……」

熱い舌が絡み合う。

互いの唾液が混じり合い、水音を立てる。

息継ぎの間も惜しむように、角度を変え、何度も何度も口づけを交わす。

彼女の手が、俺の後頭部に回され、逃げ場を塞ぐ。

俺もまた、彼女の背中に爪を立てんばかりに強く抱きしめ返す。



「はあ……っ、んん……っ」

唇が離れると、銀の糸が引いた。

スカサハは肩で息をしながら、恍惚とした表情で俺を見つめている。

その頬は、湯あたりしたのか、それとも興奮のせいか、熟れた桃のように赤い。

「……私の誇る弟子にしては、なかなか……良い口づけだったぞ」

強がりを行っているが、その声は震えている。

彼女は俺の胸に額を押し付けると、深いため息をついた。

「……もう、限界だな」

「え？」

「ここで続けるわけにはいかんだろう。……のぼせてしまう」



彼女は顔を上げ、妖艶に微笑んだ。

その瞳は、獲物を狩る直前の獣のように輝いている。

「部屋に戻るぞ。……続きは、ベッドの上だ」

彼女は立ち上がると、雫を滴らせながら湯船を出た。

月明かりに照らされたその背中は、あまりにも美しく、そして煽情的だった。
豊満なヒップが揺れる。

俺に向けられた視線は、「早く来い」と語っている。

俺たちは濡れた身体を拭くのもそこそこに、部屋へと駆け込んだ。

冷えた空気が肌を刺すが、二人の間の熱気はそれをものともしなかった。

この夜は、まだ始まったばかりだ。

師匠としてではなく、一人の女としての彼女の本気を、俺はこれから骨の髄まで味わうことになる。

第〇章 『愛の槍、あるいは甘美な特訓』

部屋に戻るなり、俺はベッドへと押し倒された。

抵抗する間もなく、視界が天井へと反転する。

その上に、濡れた髪をかき上げたスカサハが覆いかぶさってきた。

薄明かりの中、湯上がりの火照った肢体が妖しく輝いている。豊かな胸が重力に従って垂れ下がり、目の前でぶるんと大きく揺れた。

「…………ふふ。観念したか？」

彼女は勝ち誇ったように微笑むと、俺の太ももの間に膝を割り込ませた。

完全なマウントポジション。

逃げるなど許されない、女王の独壇場だ。

「ここからは……私のペースで進めさせてもらう。ただ、私の愛を受け入れればいい」

彼女の指先が、俺の腹筋を這う。

爪先で軽く引つ搔くような刺激に、身体がびくりと反応してしまう。

それを見て、彼女は満足げに喉を鳴らした。

「ん……いい反応だ。戦場での緊張感とは違う、無防備な姿……。たまらないな」

彼女はゆっくりと顔を近づけ、俺の耳元に唇を寄せた。

熱い吐息が、鼓膜を直接撫でる。

「はぁ……。この匂い……。落ち着く、と同時に……。昂る」

甘い声。

普段の凛とした声からは想像もつかないような、蕩けるような響き。

彼女はそのまま、首筋に吸い付いた。

チュツ、チュブ、と湿った音が部屋に響く。

舌先で肌を舐め上げ、時折、甘噛みをする。

「っ、スカサ……ハ……」

「……ん？　なんだ、もう声を上げるのか？　まだ……始まったばかりだぞ？」

彼女は顔を上げ、とろりとした瞳で俺を見下ろした。

その口元には、銀色の糸が引いている。

彼女はそのまま、身体をずり下げていく。

柔らかな胸が、俺の腹や股間を擦りながら移動する。その圧倒的な感触に、俺の昂りは限界を迎えつつあった。

「ふふ……。随分と、元気になっているようだな。……私の『槍』も素晴らしいが、此処も……中々のものだ」



彼女は俺の中心、硬く脈打つ部分を熱い視線で見つめた。
そこには、ただの肉体的な反応以上の、深い愛着と独占欲が見て取れた。

「……まずは、挨拶をしてやらんとな」

彼女は妖艶に目を細めると、ゆっくりと顔を寄せた。

長い髪がカーテンのように垂れ下がり、二人の世界を外界から遮断する。

そして、熱い唇が、俺の先端に触れた。

—————

「ん……っ、ちゅ……」

温かい口腔内が、俺のすべてを包み込む。

彼女の舌は、まるで生き物のように滑らかに動き、敏感な部分を執拗に責め立てた。

戦士として鍛え上げられた彼女は、あらゆる技術において天才的だ。それは、この夜の



戦いにおいても例外ではなかった。

「……んぶ、ん……ちゆる……っ」

上目遣いに俺を見上げながら、彼女は一心不乱に奉仕を続ける。
頬がこけ、喉が動くのが見える。

時折、彼女の喉の奥から、「んん……っ」という艶めかしい鼻歌のような声が漏れる。それが、俺の理性をさらに削り取っていく。

「はあ……っ、どうだ……？ 気持ちいいか……？」

一度口を離し、彼女が問いかけてくる。

その唇は濡れそぼり、妖艶な輝きを放っている。

答える余裕などない俺を見て、彼女はくすりと笑った。

「……言葉はいらないうだな。その表情を見ればわかる」



彼女は再び、先端を口に含んだ。

今度は、舌だけでなく、吸い上げるようなバキュームも加えてくる。じゅる、じゅぼ、という卑猥な水音が、静かな部屋に反響する。

「んんっ……！　ちゅ、ぶ……あ……っ」

彼女自身の息遣いも荒くなっている。

奉仕することで、彼女自身も興奮を高めているのだ。

俺の快樂が、そのまま彼女の快樂になる。その共鳴が、さらなる熱を生んでいく。

彼女の手が、俺の太ももを強く掴む。爪が食い込む痛みが、快樂のスパイスになる。

「……んぶ、あ。……すごいぞ、どんどん大きくなっていく……。私の口の中が……満たされていく……」

口を離れた彼女が、荒い息を吐きながら呟く。



その瞳は潤み、焦点が合いにくくなっているようだった。
だが、彼女の「特訓」はまだ終わらない。

「だが……口だけでは物足りないだろう？ 私も……もっと、肌で感じたい」

彼女は身体を起こすと、自慢の胸を両手で持ち上げた。

たぶん、と重たげな音がするほどのボリューム。

白く、柔らかく、そして圧倒的な存在感を持つ双丘。

「これなら……どうだ？」

彼女は俺の上に跨ると、その深い谷間を、俺の昂りにあてがった。

むにゅう……っ。



言葉にならない衝撃が走った。

極上の柔らかさが、俺を左右から強く挟み込む。

彼女の胸は、見た目以上の弾力と、吸い付くような粘り気を持っていた。硬いモノを、柔らかな肉が包み込み、呑み込んでいく。

「ん……っ、はあ……っ。……きついかな？ それとも、もつと強いほうがいいかな……？」

スカサハは俺の顔を覗き込みながら、腰を前後に揺すり始めた。

その動きに合わせて、豊かな胸が波打つように変形する。

白磁の肌に、俺の欲望が埋もれたり、現れたりを繰り返す。

その視覚的な暴力と、極上の触感のコンボは、まさに致命的だった。

「あっ、んんっ……！ ……いいぞ、すごく……熱い……」

彼女自身も、胸が擦れる刺激に感じているのか、甘い声を漏らす。

乳首が硬く尖り、俺の胸板や腕を掠める。

彼女は両手で自身の胸を抱え込み、さらに圧力を強めた。

「ほら……見る。私の胸が、食べているようだ……」

視線を落とすと、彼女の言葉通りだった。

白い双丘の谷間に、俺のモノが完全に埋没し、彼女が腰を動かすたびに、肉の波に揉まれている。

その光景はあまりにも背徳的で、脳髓が焼き切れそうになる。

「……私の胸、好きだろうか？ いつも……そうやって、熱心に見ているものな」

彼女は俺の心を見透かすように、とろりとした笑顔を見せる。

そして、わざと胸の肉で先端を擦り上げるように、大きく腰を引いた。

「くっ……!!」



「んふふ……。もっと、啼いてもいいのだぞ？ ……私しか聞いていない」

彼女は上半身を低くし、顔を近づけてくる。

谷間に挟まれたまま、彼女の舌が俺の首筋や鎖骨を舐め上げ、下半身からは強烈な締め付け、上半身からは甘い愛撫。

逃げ場などどこにもない。

「はあ……。つ、あ……。つ。……。私の中で……。高まっていくのがわかる……」

彼女の息遣いが、さらに荒くなる。

額に玉のような汗が浮かび、髪が頬に張り付く。その乱れた姿さえも、神々しいほどに美しい。

「……。んっ、くう……。つ。……。我慢するな。……。全部、私によこせ……。つ」

彼女の腰の動きが激しくなる。



むちゅ、むちゅ、と肉と肉が擦れ合う音が早くなる。
谷間の圧力は限界まで高まり、俺を絶頂へと導いていく。

「出すぞ……!!」

「ああ……っ！ いいぞ、構わん……っ！ 私の胸に……その熱を……ぶちまける……っ！！」

彼女の叫びにも似た懇願と共に、俺は限界を迎えた。
白い谷間に向かって、熱い想いの丈を解き放つ。

「んん……っ！！」

彼女は俺を強く抱きしめ、放たれる熱を受け止めた。

ビクビクと脈打つ俺の身体を、母のように、恋人のように優しく包み込む。
白濁した液体が、彼女の美しい胸を汚し、流れ落ちていく。

だが、彼女はそれを厭うどころか、愛おしそうに見つめていた。



「……はあ、はあ……。……やったな」

荒い息を整えながら、彼女は微笑む。

その顔は、戦いに勝利した女王の顔ではなく、愛する男を受け入れた一人の女の顔だった。

彼女は指で胸についた証をすくい取ると、べろりと舌で舐め取った。

「……ん。……悪くない味だ」

その仕草の色気に、俺は再び気を失いそうになった。

だが、彼女はまだ満足していないようだった。

妖艶な光を宿した瞳が、再び俺を捉える。

「……さて。これで少しは落ち着いたか？ ……だが、本番はこれからぞ？」

彼女はゆっくりと、身体を起こした。



その言葉の意味を理解した時、俺は今夜、本当に生きて帰れるのか不安になった。いや、この女王の腕の中で果てるなら、それも本望かもしれない。

第4章 『影の国より深く、交わる魂』

熱い証を胸に受け止めた後、スカサハはしばらく俺を抱きしめたまま、微動だにしなかった。

荒い息遣いだけが、鼓膜の奥で響いている。彼女の心臓の鼓動は、まだ狂ったように早鐘を打っていた。

「はあ……っ、はあ……っ。……全く。恐ろしい熱量だな」

ようやく顔を上げた彼女の瞳は、まるで戦場を駆け抜けた後のように、強い光と疲労感を宿していた。

だが、その表情は満たされている。

「……私の誇り高き胸に、全てを刻み込んだ。……これで、誰にも文句は言わせんな」

そう言って、彼女は優しく微笑んだ。

そして、傍らに置いていたタオルを手に取り、俺の胸に付着した愛の証を、丁寧に拭き始めた。その仕草は、戦士の師というより、慈愛に満ちた母のようでもあった。

「んんっ……!!」

彼女が胸を拭う指先に、少し力がこもる。

刺激された胸の先端が、またもや反応して硬くなる。

俺が思わず声を発すると、彼女は濡れた視線で俺を見つめ返した。

「……こんなに簡単に、また昂るのか。……本当に、欲深い身体だ」

そう言いながらも、彼女の口元には満足げな笑みが浮かんでいる。拭き終わると、今度は彼女が、自分の濡れた胸を俺の腕に預けた。

「次は……私の番だ」

言葉と同時に、彼女は俺の身体をひっくり返し、優しく抱き起こした。

そして、俺が仰向けになったのを確認すると、まるで自身が祭壇であるかのように、その肢体を俺の上に重ねてきた。

「見る。……その熱を受け止めた、私の胸だ」

彼女は再び、自らの胸を両手で持ち上げた。

その白く豊かな肉は、先ほどの興奮でさらに火照っている。

「揉め」という、無言の命令。

俺は恐る恐る、両手を彼女の胸に伸ばした。



指が触れると、すぐに彼女は目を閉じる。

「……遠慮はいらない。さつきよりも、もっと強く、私の全てを確かめろ」

その声に促され、俺は力を込めて、その柔らかな肉を深く掴んだ。
むぎゅ……、と、極上の餅のような感触が指先に伝わる。

両手でも余るほどのポリュームを、俺は夢中になって揉みしだいた。

「んんっ……！ ああ……っ。そこだ……っ」

スカサハの口から、甘く、切ない喘ぎ声が漏れる。

彼女は、俺の行為によって、自身の身体が蹂躪されていくのを心から喜んでいるようだった。

「女王」という支配者としての地位を捨て、ただ「一人の女」として俺の愛に身を委ねる。その背徳的な快感が、彼女の魂を震わせているのだ。



「……はあ……っ。強く……。私の胸は……もつと強い刺激を欲している……っ」

俺が胸の根元から持ち上げるように揉むと、彼女の身体はビクリと大きく震えた。彼女の指が、俺の肩を強く搔きむしる。

「くう……っ！　そこ……っ、そこがいい……っ！　……ああ、もう……っ、溶けてしまい
そうだ……っ」

乳首が硬く尖り、まるで何かを求めているかのように天を向く。
俺は片方の手で、その硬くなった乳首を摘み上げ、優しく引っ張った。

「んあ……っ！　ひ……っ！」

鋭い刺激に、スカサハの息が詰まる。



その視線は、既に愛欲で酩酊しきっていた。
彼女は俺の頭を両手で掴み、強く引き寄せた。

「……来い」

それは、女王の命令。

俺は、彼女の豊満な胸に顔を埋めた。

湯上がりど愛の証の混じった、甘く濃厚な香りが鼻腔を満たす。

「……私の全てを……ものにしろ」

彼女は俺の頭を強く固定したまま、自ら胸を押し付けてきた。

俺は、誘われるままに、その硬く尖った蕾を口に含んだ。

ちゅぶ、ちゅる……と、艶めかしい水音が部屋に響き渡る。

「んんっ、あ……っ！ ……うそ、やめ……っ、あ……っ」



彼女の口から漏れるのは、かつて戦場で見たことのない、完全に乱れた喘ぎ声だった。俺が吸うたびに、彼女の身体は反り返り、腰が跳ねる。

彼女は片方の手で、もう片方の胸を強く押さえつけ、俺の口に押し込む手助けをする。

「はあ……っ、ああ……っ、まるで……魂を吸われているようだ……っ」

俺の舌が、彼女の蕾を遊び尽くす。

優しくなめたり、強く吸い上げたり、歯で軽く噛んだり。

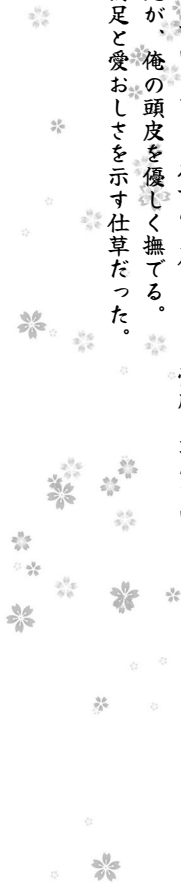
そのたびに、彼女は甘い吐息を漏らし、俺の髪を掻き乱す。

「やめる……っ、ん、やめないで……っ！ ……変になる……っ！ ああ……っ、ダメだ……っ」

「ダメだ」と言いながら、彼女の身体はさらに快感を求めている。

彼女の指先が、俺の頭皮を優しく撫でる。

それは、満足と愛おしさを示す仕草だった。



「……私は、愛でてくれるからこそ、この胸が好きなのだ……っ。……もつと……もつと深く……吸え……っ」

その言葉を聞いた瞬間、俺の愛は爆発した。
俺は彼女の蕾を、本気で吸い上げた。

「ちゅば……っ！ んー、じゆるじゆる……っ！」
「ひっ、あああ……っ！ そこ……っ、くっ……！！ ……ダメだ、もう……っ、感じすぎる……っ！！」

彼女の腰が激しく痙攣し、身体全体にゾクゾクと震えが走った。
胸を吸われているだけの行為なのに、まるで全身の魂が抜けていくかのような、強烈な快感が彼女を襲っているのが、肌を伝わって分かった。

—————



充分に愛で終え、彼女の胸から顔を離すと、スカサハは深い満足感に満たされた、蕩けるような表情をしていた。

胸の先端は赤く腫れ上がり、まるで蜜で濡れているかのようなようだ。

「……………はあ、はあ。……………素晴らしい授業だったぞ。……………弟子にしては、やるではないか」

そう言っただけで、彼女は再び身体をずり下げ始めた。今度は、愛撫の対象を、俺自身に移すつもりだ。彼女の顔が、俺の中心へと近づいていく。

「だが、まだ終わらんぞ。……………私は、全てを把握し、完全に支配しなければ気が済まない」

彼女の濡れた唇が、俺の昂りにそっと触れた。今度は、舌先で優しく、ゆっくりと形をなぞる。湯と唾液と愛液が混じり合った、濡れた感触。



「……はあ。なんて……愛らしいのだろう。……こんなにも熱く、私を求めている……」

彼女は一度、俺を愛おしそうに見つめる。

そして、その目には、次の段階への強い決意が宿った。

「覚悟しろ。……次は、お前を影の国の底まで連れて行ってやる」

そう言って、彼女は自ら両手で俺の腰を掴み、そのまま自分の中心へと導いた。

熱く、湿った感触。

滑り込ませようとする俺の動きを止め、彼女は俺の耳元に囁く。

「……待て。焦るな」

身体は求めているのに、一瞬の間を与える。これが、女王の持つ支配欲であり、最高の演出なのだ。



「……目を閉じる。私を感じろ」

彼女はゆっくりりと、俺の腰を上下に動かし、俺の先端を、自身の熱い入り口に当てた。
チュツ、という粘着質な音。

そして、一呼吸。

「……影の国の女王、スカサハが許す。……さあ、私と、一つになれ」

彼女の熱い吐息と、愛に満ちたその命令と共に、俺はついに彼女の中心へと、深く、深く、滑り込ませた。

第5章 『永遠の誓い、影の国の果てで』



ズブリ、と。

熱く、湿った肉の壁を押し広げ、俺の全てが彼女の深淵へと沈んでいく。

「んくう……っ！ はあ、あ……っ！ ……入っ、た……」

スカサハが仰け反り、苦悶と快楽が入り混じった声を上げた。

彼女の中は、想像を絶するほどに熱く、そして狭かった。まるで侵入者を拒むように、四方八方から強烈な力で締め付けてくる。

だが、その奥底では、脈打つ粘膜が俺を歓迎するように吸い付いてきた。

「……はあ、はあ。……どうだ？ 私の中は……。知っている、どの戦場よりも……熱いだろう？」

彼女は俺の上に跨ったまま、荒い息を吐き、挑発的な笑みを浮かべた。

だが、その額には玉のような汗が浮かび、瞳は快楽で潤んでいる。余裕を装っているが、彼女自身もこの結合の衝撃に震えているのが分かった。



「……すごい。熱くて……溶けそうだ……」

「ふふ。……溶けてしまえ。私の熱で……骨の髄までな」

彼女はそう嘯くと、ゆっくりと腰を動かし始めた。

じわり、と深部を擦り上げられる感覚に、俺は思わず声を漏らす。

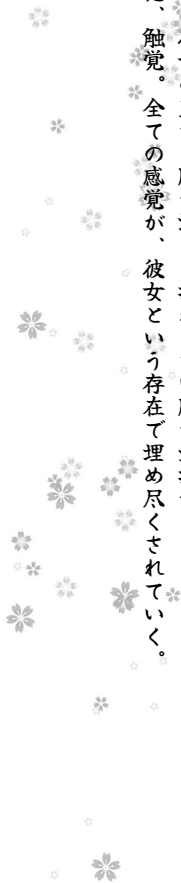
「あ、ぐ……っ！」

「ん……っ。いい声だ。……さあ、始めようか。これが……最後の特別授業だ」

彼女が腰を落とすたびに、俺の先端が彼女の最奥を突き上げる。

そのたびに、彼女の豊かな胸が激しく揺れ、白い肌が波打つ。

視覚、聴覚、触覚。全ての感覚が、彼女という存在で埋め尽くされていく。



—————
パンッ、パンッ、パンッ……。

部屋に響くのは、肉と肉がぶつかり合う淫らな音と、二人の荒い喘ぎ声だけ。

「あぁっ！ んんっ！ ……そこ、深い……っ！ もっと……っ！」

最初はゆっくりと味わうように動いていたスカサハだったが、次第にその動きは激しさを増していった。

彼女は俺の肩に手を突き、自ら腰を打ち付けてくる。

その動きは、戦場での槍捌きのように鋭く、そして正確に俺の弱点を突いてくる。

「はぁ……っ、激しいな……っ！ そんなに動いたら……っ」

「黙れ……っ！ ……私を、こんな風にしたのだぞ……っ！ 責任を……取れ……っ！」



彼女は乱れた髪を振り乱し、獣のように食欲に快楽を求めていた。
俺も負けじと腰を突き上げ、彼女の動きに応える。

「んぎいつ！ あ、ああ……っ！ 突き上げ……るな……っ！ ……いや、もつと……っ、
もつとだ！ 私を……壊す気で来い……っ！」

女王の命令に応え、俺は本能のままに腰を振るった。

彼女の敏感な場所を擦り、突き、扶る。

そのたびに、彼女の内壁が痙攣し、俺を強く締め付ける。

「くっ……！ 締め付けが……すごい……っ！」

「当たり前だ……っ。私は……一度捕らえた獲物は……絶対に逃がさん……っ！」

彼女は俺の首に腕を回し、唇を重ねてきた。

激しい動きの中で交わされる口づけは、息継ぎすら許さないほどに濃厚で、乱暴だ。

舌が絡み合い、唾液が混じり合う。

下半身の結合と、口づけによる結合。上と下から同時に責め立てられ、俺の理性は完全に消し飛んだ。

「んんーっ！ ぶはっ……。はあ、はあ……。っ。……。中は、最高だ……。もう……。限界が近い……。」

俺が掠れた声で告げると、彼女はニヤリと笑った。

「……奇遇だな。私もだ。……。奥が、全てを欲して……。疼いている」

彼女は俺の腰を両足で強く挟み込み、逃げ場を完全に封じた。

「……ここに出せ。私の一番深い場所に……。魂を、刻み込め……。っ！」



ラストスパート。

互いに限界を超えた速度で、腰を打ち付け合う。

「ああっ！　いくっ！　……もう、ダメだ……っ！　……くるっ、きちやう……っ！」

スカサハの口から、もはや言葉にならない絶叫がほとばしる。

彼女の身体が弓なりに反り、内壁が凄まじい力で俺を締め上げた。

それが引き金となった。

「俺も……いくっ！　……スカサハ……っ！」

俺は渾身のかで腰を突き上げ、彼女の最奥に到達した瞬間、全ての熱を解き放った。

「んぎイイイイ……っ！！」



ドクン、ドクン、ドクン……！

脈打ったたびに、熱い奔流が彼女の中に注ぎ込まれていく。

彼女は俺にしがみつき、ガクガクと身体を痙攣させながら、その全てを受け止めていた。

「ああ……っ、ああ……っ、熱い……っ！ 中が……お前で……いっばいだ……っ！」

彼女の内壁が、注がれたものを逃すまいと、リズムカルに収縮を繰り返す。

その余韻の波が、俺たちの意識を真っ白な空白へと連れ去っていった。

—————

嵐が過ぎ去った後の静寂。

俺たちは繋がったまま、どちらからともなく倒れ込み、重なり合って荒い息を整えていた。

汗ばんだ肌が触れ合う感触が、心地よい疲労感と共に、現実感を呼び戻してくる。



「……はあ。……はあ。……まさか、この私が……ここまで乱されるとはな」

俺の胸に顔を埋めていたスカサハが、ポツリと呟いた。

その声は、先ほどまでの激しさが嘘のように、甘く、蕩けていた。

「……気持ちよかったか？」

俺が髪を撫てながら問いかけると、彼女は小さく頷き、俺の胸板にキスをした。

「……愚問だな。……私のこの姿を見れば、わかるだろう？」

彼女はゆっくりと顔を上げ、とろんとした瞳で俺を見つめた。

その表情は、この世の全ての幸福を凝縮したかのように美しかった。

「最高だったぞ。……その熱、愛、全てが……私の奥深くまで届いた。……これほどの充足感、どの戦いでも得られなかったものだ」

彼女は俺の唇に、優しいキスを落としたり。

それは、先ほどまでの貪るようなキスとは違う、慈愛に満ちた口づけだった。

「俺もだ。……今までで一番、最高だった。あなたが愛しくて……たまらなかった」

俺が素直な気持ちを伝えると、彼女は嬉しそうに目を細めた。

「……ふふ。可愛いことを言う。……だから、お前は私の特別なのだ」

彼女は再び俺に抱きつき、その豊かな胸を押し付けてきた。

まだ体内に残る俺の余韻を感じながら、彼女は満足げに呟く。

「……当然、離してはやれんな。今夜は……このまま、朝まで繋がってしよう」

それは、影の国の女王からの、絶対にして最愛の命令だった。



俺は彼女を強く抱きしめ返し、その温もりの中で、深い微睡みへと落ちていった。

エピローグ『朝陽に溶ける、甘美な残り香』

—————

障子の隙間から差し込む朝陽が、乱れに乱れた布団を白く照らし出している。

重いまぶたを持ち上げると、視界いっぱい、愛しい人の寝顔があった。

スカサハが、俺の腕を枕にして、安らかな寝息を立てている。

普段の凛とした「師匠」としての顔つきはどこへやら。無防備に緩んだ口元や、長い睫毛が震える様は、ただの愛らしい少女のようだ。

「……………う……………」

彼女が身じろぎをするたびに、布団から露出した白磁の肌が露わになる。

その首筋や鎖骨、そして豊かな胸には、昨晚俺が刻み込んだ無数の愛の証——赤いキス

マークが、花びらのように散っていた。

その光景があまりにも淫らで、そして所有欲を掻き立てるものであり、俺の下半身は朝から正直な反応を見せてしまった。

「……ふふ。……朝から、元気だな」

不意に、耳元で甘くしわがれた声があった。

見れば、スカサハが薄目を開け、とろりとした視線で俺を見上げていた。

「……起こしたか？」

「いや……。殺気……ではなく、色気に当てられて目が覚めた」

彼女はくすりと笑うと、布団の中で身体を密着させてきた。

もちっ、とした柔らかく温かい感触が、全身を包み込む。特に、下腹部に押し付けられた太ももの感触が凶悪だった。



「……昨晚、あれほど愛し合ったというのに。……まだ足りないのか？ 欲張りな弟子だ」

彼女は呆れたように言いながらも、その手はシーツの下へと潜り込み、俺の昂りを優しく握りしめた。

「んっ……！」

「……熱い。そして、硬い。……ふふ、私の身体を思い出して、興奮していたのか？」

彼女の指先が、先端をくすぐるように弄ぶ。

カリカリ、と爪先で刺激されたかと思えば、掌で包み込んで扱き上げる。朝特有の敏感な状態には、その優しい愛撫でさえも強烈な刺激となった。

「はあ……っ、ダメだ……っ、そんなに優しくされたら……」



「……ダメ、か？　口ではそう言いながら……ここからは、蜜が溢れているぞ？」

彼女は布団を跳ね除けると、俺の上に跨った。

朝の光を背負った彼女の裸体は、神々しいほどに美しかった。

豊かな胸が重力に従って揺れ、その先端は昨晚の愛撫の名残で、まだ赤く充血している。

「……おはようのキスは、ここがいいか？」

彼女はゆっくりと腰を落とし、自身の秘部を、俺の先端に擦り付けた。

ぬちゃ……り。

湿った音が響く。彼女自身もまた、昨晚の余韻と、朝の昂りて濡れそぼっていたのだ。

「……入るぞ。……目覚めの、一発だ」



スカサハは俺の肩に手を置くと、ゆっくりと、本当にゆっくりと腰を沈めていった。

「んくう……っ、ああ……っ！……太い……っ。朝から……凶暴だ……っ」

彼女の狭い入り口が、無理やり押し広げられていく。

キチキチに締まった肉の輪が、俺を根本まで飲み込んでいく。

「はあ……っ、んんっ……！……奥まで……届い、た……っ」

完全に結合した瞬間、彼女は大きく仰け反り、天井を仰いでため息をついた。その首筋が弓なりに反り、美しいラインを描く。

「……どうだ？ 朝一番の……私の中は」

彼女は腰を回すように動かし、俺の中での位置を調整する。

内壁がうねり、俺を搾り取るように締め付けてくる。



「最高だ……っ。締め付けが……昨日よりすごい……」

「ふふ……っ。身体が……お前を離したくないと……言っているのだ……っ」

彼女は俺の胸に手をつくすと、自ら激しく腰を上下させ始めた。

パンッ、パンッ、という乾いた音と、グチュッ、グチュッという水音が入り混じる。豊かな胸が、激しい動きに合わせてバウンドし、目の前で踊る。

「あぁっ！ んっ！ ……深いっ！ そこっ、グリグリしないで……っ！」

俺が下から突き上げると、彼女は敏感なスポットを突かれたのか、ビクリと身体を震わせ、嬌声を上げた。

「……っ、生意気だぞ……っ！ 主導権は……私が握る……っ！」



彼女は負けじと、腰を打ち付ける速度を速める。
髪が乱れ、汗が飛び散る。

その表情は快楽に歪み、涎が口端から垂れていることにも気づいていないようだった。

「はあ……っ、はあ……っ！　いいぞ……っ、もつと……っ！　私を……めちやくちやにしてくれ……っ！」

彼女の中の「女」が、理性を完全に凌駕していた。

女王としての威厳と、ただの雌としての悦び。そのギャップが、俺を更なる興奮へと駆り立てる。

「いく……っ！　俺も、もう……っ！」

「構わん……っ！　出せ……っ！　朝から……たつぶり……注ぎ込めえええっ！！」

彼女が腰を強く落とす、最奥で俺を待ち構える。



俺はその誘いに応え、渾身のかで突き上げ——放った。

「んぎいいいいい——っ！！！」

ドクン、ドクン……！！

熱い塊が、彼女の深部で炸裂する。

彼女は白目を剥きかけながら、全身を硬直させ、その全てを受け止めていた。

—————

長い、長い絶頂の余韻。

俺たちは繋がったまま、どちらからともなく倒れ込み、重なり合って荒い息を整えていた。

スカサハの身体からは、甘い汗の香りと、事後の濃厚な匂いが立ち上っている。

「……はあ、はあ。……まったく。朝から、とんだ重労働だ」



彼女は俺の胸に顔を埋めたまま、くぐもった声で文句を言った。だが、その声には微塵も怒気はなく、むしろ甘えの色が濃い。

俺が彼女の背中を優しく撫でると、彼女は猫のように目を細め、擦り寄ってきた。

「……だが、悪くない目覚めだった」

彼女は身体を起こすと、乱れた髪をかき上げた。

朝陽に照らされたその姿は、逆光の中で神々しいまでのオーラを放っている。

彼女は俺の頬に手を添え、優しく口づけをした。

「……帰る準備をしようか。……夢のような時間は終わりだ」

少し寂しげな響き。

だが、彼女はすぐに、不敵な笑みを浮かべた。



「だが、勘違いするなよ？　これは終わりではない。……始まりだ」

彼女は俺の耳元に唇を寄せ、とろけるような甘い声で囁いた。

「影の国に戻っても……私の部屋に來い。……続きを、たっぷりとしてやるからな」

その言葉は、どんな契約よりも重く、そして甘美な、未来への約束だった。

俺たちは視線を交わし、笑い合う。

この温泉宿での一夜は、俺たち師弟の、そして恋人としての絆を、永遠のものへと変えたのだった。

く完く

